

さて、今回のコラム、今回は『わかるように伝えるための構造化』ということで、ティピヤトーテムでも行なっているテーブルクロスを使った活動の切り替えなどの話をしていただいています。坂井先生が以前勤めていた香川大学附属特別支援学校に見学に行かせて頂いた事があるのですが、本当に隅々まで構造化されていて、感動しました。その時の経験は現在サンフェイスのバイブルになっています。

第4回 『わかるように伝えていますか』

香川大学 坂井 聰

・わかるように伝えるための構造化

前回、わかるように伝えるための構造化の話を少ししました。今回は少し細かく見ていきたいと思います。まず、物理的な構造化です。物理的な構造化とは、場所と活動を対応させることによって、そこで何をするのかをわかりやすく伝えるというものです。

重度の障がいのある人の場合、言葉でいろいろ伝えられても理解できないことが多いと考えられます。特に発達障がいのある重度の人の場合は尚更です。そこに行ってもわけのわからない言葉で伝えられるだけで、何をしてよいのかさっぱりわからない。このような状況なのです。

同じような状況に置かれたとしたら誰でも混乱するに違いありません。

そこで、場所と活動をできるだけ一対一にすることによって、一つの場所を多目的に使わないようにするのです。こうすることによって、そこに行けば何をすればよいのかをわかりやすく伝えるわけです。

勉強のスペース、テレビを見るスペース、着替えのスペースといったように、それぞれの活動に対応したスペースを設けるようにするわけです。

よく考えてみるとわかることですが、私たちも着替えのスペースや娯楽のスペース、趣味の部屋など分けているのではないでしょうか。

私たちがわけているのは分かりやすくするという理由ではないかもしれません、構造化されていることは違いありません。人が家に訪ねてきたとき、趣味の部屋を見れば、「ここが趣味に部屋ですね」と誰でもわかるはずです。同じように考えてみればよいのではないかと思います。

さて、このような話をすると、その意図はよく分かるのですが、活動に対応するだけのスペースを確保することができないので困っていますという話をよく聞きます。そこは考え方だと思うのです。

例えば造形活動を机上でしなければならないとしましょう。その机は給食のときにも使っているものです。このような場合は、机の上に敷くテーブルクロスを変えてみるとことで対応することはできないでしょうか。造形活動のときには白のテーブルクロス、給食のときには花柄のテーブルクロス。ちょっとした工夫でわかるように伝えることができるのではないかと思うのですがどうでしょう。

場所と活動を対応させることでわかりやすく伝えることができればよいのです。

もしそれがスペース的に不可能なのであれば、どのようにすればそのスペースを共有しても混乱しなくなるかということを考えてみればよいと思うのです。

最後に、物理的な構造化をしている教室を見に行くと、段ボールでついたて等を作っている場合が非常に多いように思われます。わかりやすく伝えるために使っているので、その理由はよく分かるのですが、できるだけきれいなものを用いてもらいたいと思います。見て美しい物理的な構造化も考えなくてはならないのではないかと思うのです。

一度自閉症のある人たちに聞いてみたいと思います。

「あなたならどのように構造化された環境で学びたいですか？」と。

坂井聰先生の紹介

(プロフィール)

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞(著書)

暮らしの中のコミュニケーション（やまびこの里） クラスルームコミュニケーション（こころリース出版会）
自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア（エンパワメント研究所）など